

「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらす(Ⅱコリント 7:10)」。

「神の御心に適った悲しみ」と言うと、何やら麗しいような感じだが、この「悲しみ」とは実際どのようなことなのか。号泣するペトロがそれをもろに伝えている。

「ペトロは〔今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう〕と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた(ルカ 22:61~62)」。

ペトロ(岩)とはニックネーム、大柄で屈強な姿からの命名。そんな男が泣き崩れている。「御心に適った悲しみ」は救いへの第一歩。ゆえに、みっともないところも隠しておけない。

イエスは捕えられ中庭に縛られている。他の弟子たちは霧散したが、ペトロだけは「遠く離れて従った(22:54)」。近くは無理でも、遠くからなら従えた。

遠く離れてでも、勇気を出して従うこと自体立派じゃないか。なぜペトロは危険を冒してまで物騒な中庭へ踏み入ったのか。彼は直前に「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております(22:33)」と答えおり、自ら発した言葉に従ったのではないか。

「あなたは立ち直ったら(22:32)」というイエスの言葉をふり払い、自分の言ったことに責任を負おうとした。しかし人間の決心は脆く崩れ落ちる。イエスが予告した通り(22:34)、ペトロは三度知らないと否んだ(22:57,58,60)。

ペトロは怪しまれたが(22:56,58)、騒ぎになるほどでもなかった。一時間ほどして「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから(22:59)」と正体がばれたのは、故郷のガリラヤ訛りによって。

この故郷言葉に注目したい。弟子たちは故郷の言葉で信仰に目覚め、希望に燃え、イエスに従った。そして今、故郷の訛りで本当の姿が露わになり、イエスを否み(22:60)、弟子としての自らをも否んだ。

啄木は「ふるさとの訛り(岩手)なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく」と詠み、寺山修司は「ふるさとの訛り(青森)なくせし友といてモカコーヒーはかくまで苦し」と本歌取りした。

故郷言葉は心の深部に根をおろしている。異郷(エルサレム/東京)にある時は、故郷はいっそう心に染みる。ペトロは、私刑に遭う恐怖もさることながら、故郷からの師イエスを否む自分自身をつきつけられ、愕然となった。

それにしても疑問なのは、きつい挫折を体験した直後に、号泣できるものだろうか。

「主は振り向いてペトロを見つめられた(22:61)」。ペトロが最後に否んだ時、縛られ首を垂れていたイエスは顔を上げ、ペトロを見つめた。そのまなざしはどうであったろうか。

人間の弱さ、みっともなさ、神よりも自分に拘わる頑なさ、それらすべてを赦し、「お前への愛は変わらないよ」であろう。最悪の低みにあるイエス(22:63~65)。そこからのとてつもない赦しと愛が、静かなまなざしにあった。

ペトロはそのまなざしに打たれ、打ち砕かれ、それが号泣として現れた(22:62)。ペトロの希望はイエスの愛のまなざしを拒絶せず、自分を砕かれるに任せたこと。

「神の御心に適ったこの悲しみが、どれほどの熱心、弁明、憤り、恐れ、あこがれ、熱意、懲らしめをもたらしたことだろう(Ⅱコリント 7:11)」。

復活においてペトロは、悲しみがもたらした混沌から立ち上がり、キリストの死と命をまとう(4:10)。



《おまけのひとこと》

悲しみは悔い改めに通じ 悔い改めは救いに通ずる ただし 一本道ではない 紆余曲折 袋小路 工事中の道を進むこともあろう とはいえ 悲しみの重さでついた轍は 取り消されることがない